

図書館情報メディア専攻における教育

石井啓豊

図書館情報メディア研究科教授

図書館情報メディア専攻長 図書館情報学系長

はじめに

図書館情報メディア研究科は筑波大学と図書館情報大学の統合（平成14年10月）によって生まれた。図書館情報学という領域のユニークさもあって図書館情報メディア専攻の特徴は学内でも、また学外でもまだ十分知られていないと思われる。そこで、専攻の教育・研究内容と関連づけながら、教育の特徴について説明したい。

図書館情報メディア専攻の対象領域

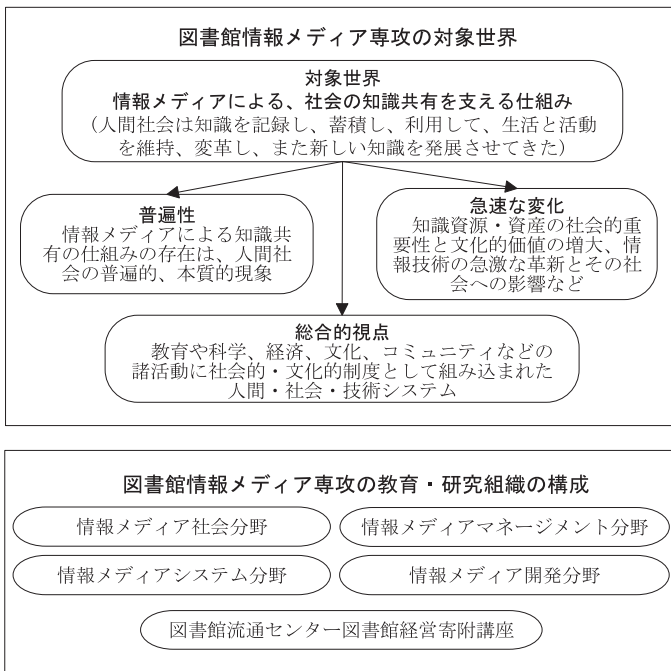
図書館情報メディア専攻（以下、専攻という）が取り組む領域は伝統的には図書館情報学と呼ばれてきた。図書館情報大学時代から情報技術との総合を目指してきたので、現在では国内でも他には例がないユニークな領域として展開している。

専攻の教育と研究が対象としている世界を次ページの図の上段に示した。専攻の対象世界は、その名称から図書館についての

学問領域と受け取られてきた。まさにそのとおりであるが、同時にそうではないともいえる。教育・研究の対象世界はそれが現れた現実の姿だけで規定されるわけではなく、そこに内在する一般性においても規定される必要がある。

専攻の対象世界は、ひとことという「情報メディアによる、社会の知識共有を支える仕組み」である。人々は広い意味で知識を基盤として生きている。ここでの知識は科学的知識だけを指しているわけではない。ある社会の人々が世界と自分自身について信じている認識、共有の感性はその社会固有のものであると同時に、社会相互の影響関係のもとにもある。図書館はこの広い意味での知識の共有を支える仕組みの一つとして発展してきた。

知識の表現（情報メディア）は情報として人々に伝えられ、知識共有を保証する契機となる。専攻の関心の中心はこの部分に



ある。人間社会は本というメディアを発明する以前から知識を共有するために何らかの仕組みを維持してきたし、インターネットが普及しデジタル情報が交換される時代にも、技術や制度は異なるであろうが、デジタルライブラリやその他の仕組みを必要とする。やがて、人々の活動を支えるのに必要な知識がどこにいても、いつでも利用できるような状況、知識があたかも空間の中に溶け込み遍在しているような(ユビキタスな)状況が生まれ、また、新しく生成される知識や情報がいつでもその中に統合されていくような状況を想像すること

もできる。知識共有の仕組みは人間社会にみられる普遍的、本質的な現象であり、教育や科学、経済、文化、コミュニティなどの諸活動に社会的・文化的制度として組み込まれた人間・社会・技術システムと捉えることができよう。

今日の情報技術の発展を契機として、知識共有の方法と仕組みは、融合し境界が不分明なものとなりつつあるように思われる。また、知識資源・資産の社会的、文化的重要性も強く認識されるようになってきた。この伝統的な世界を内在しつつ、新しい状況の中で発展するというダイナミックな状

況にあって、その原理を解明し、制度と技術を発展させ、新しい時代に適合し、社会をリードする人材を養成することが専攻の使命である。

専攻の特徴

専攻の特徴を列挙しよう。

(社会的価値の実現) 専攻は、たとえば「健康」や「食料生産」といった実際的な社会的価値を実現することを目的とした領域と同様、「社会の成り立ちの基本としての知識共有」という社会的価値の実現を目的とする領域である。この点で、純粋科学とは性格を異にする。

(ユニークな専門性) 専攻の最もユニークな点はいうまでもなく、領域のユニークさである。既存の諸科学とは異なる視点からの「情報メディアによる、社会の知識共有を支える仕組み」に対する関心と、それに対応した専門知識の集積が専攻の基本的な特徴である。

(多様性と総合性) さらに、この対象世界に内在する原理を解明し、目的実現のための応用知識を開発するため、多様なアプローチを総合的に含むという意味で、総合的な性格を持つ。図書館情報学とともに、人文学、社会科学、情報技術、認知科学といった幅広いアプローチから対象世界に取り組んでいる。

(職業との結合) もう一つの特徴は、対応する専門的職種が実社会に存在する点である。これまでも図書館員や特許部門・資料室等の担当者、情報検索の専門家、情報処理技術者といった多くの人材を育ててきたし、情報技術の進展とともに新しい職種も生まれつつある。また、この領域の特徴は社会の様々な活動の中に、知識を活用し、形成する活動が埋め込まれている点であり、たとえば、企業活動においても様々な領域で知識と情報を扱うことができる専門的人材が今後ますます必要とされる。同時に、職業人のリカレント教育に対するニーズも強く、このことは前期課程、後期課程ともに社会人の比率がかなり高いことにも現れている。

教育体系

以上のような特徴を踏まえて、専攻の教育体系は複合的なねらいを持たせている。養成する人材としてのねらいは、前期課程で修士学位を取得して、社会に出て高度な専門的職業人として活躍すべき人材、前期課程と後期課程で博士学位を取得して、研究と教育に携わるべき人材、そして、前期課程と後期課程を修了し博士学位を取得して、実務の世界で変化を先導し、新しい世界を切り開くべき人材である。三番目の人材は、伝統的な研究者というイメージでは

なく、専門知識と問題発見・解決能力によって実際の側面で社会をリードする人材である。

専攻の教育体系は、「ユニークな専門性」とともに「多様性と総合性」を活かすことと、三つのタイプの人材養成を実現すること、さらに社会人のリカレント教育ニーズに応えることといった、複合的な目標に込めなければならない。

そのために、教員、学生を図の下段に示した4つの分野に配置し、それぞれの専門性を生かした教育をはかるとともに、履修上の自由度を高くすることによって、学生の幅広い学修を促してきた。研究指導においても複数教員による指導体制を導入してきた。また、東京キャンパスの大塚地区にサテライト教室を設け、夜間および土曜日開講を行って社会人の就学を可能にしている（具体的なカリキュラムや履修等については、<http://www.tsukuba.slis.ac.jp/grad/>を参照）。

課題への取り組み

現在の教育体系の基本構造はすでに約3年間にわたって運用してきた。上述のような複合的な体系を必要とし、また、対象世界において技術と社会の変化が激しいので、実世界での動きを踏まえた教育を常に工夫しなければならない。そこで、専攻の本質

を維持しつつ、これからの社会のニーズに応えた教育体系を再構築するために、昨年度から教育体系全般の見直し作業に着手している。

平成18年度からの新しい取組みとして、図書館経営に関わる研究と人材養成を目的として、平成18年度から3年間の予定で、「図書館流通センター図書館経営寄附講座」を設置することとした。公共図書館等の経営の基本的な枠組みである公共サービスと公共経営に関する専門家をあらたに加えて、前期課程に「図書館経営管理コース（仮称）」を開設する。あわせて、公共サービス研究、公共経営研究、図書館情報メディア研究を総合的に結合して、図書館の新経営論に関する研究を発展させる予定である。

（いしい ひるとよ／図書館情報学）